

# 古代山城は完成していたのか

亀田修一

## 1. はじめに

日本列島で確認されている古代山城には朝鮮式山城と呼ばれているもの、神籠石系山城と呼ばれているものがある。前者は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、後者はその本来の名前は分からぬが、列石を伴う城壁や水門の遺構などから古代の山城と考えられているものである。特に後者に関しては、土壘前面下部の列石が大きな特徴として認識されている。ただ、近年の発掘調査の進展によって、両者が基本的に同じ構造物であることが認識され、古代山城として同じように扱うべきであるという考えが増え、新規に発見される「神籠石」も「・・山城」「・・城」と名付けられるようになっている。

朝鮮式山城に関しては、前述のように『日本書紀』などにその築城・修築記事がある。

天智天皇2(663)年の白村江の戦いにおける敗戦、百濟からの多くの人々の日本列島への亡命、唐・新羅が日本列島へ攻めてくるのではないかという危機感などから、天智天皇3(664)年福岡県太宰府市などに水城が築かれる。そして翌天智天皇4(665)年、長門国の城、筑紫国の大野城・櫟城が百濟からの亡命貴族(將軍)達率答林春初・達率憶禮福留・達率四比福夫らによって築かれる。さらに天智天皇6(667)年、倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋嶋城、対馬国の金田城が築かれる。そして文武天皇2(698)年、大宰府に大野・基肄・鞠智の3つの城を繕治させている<sup>(1)</sup>。

このように記録にみられ、かつその所在地がおおよそ確認されている朝鮮式山城は6カ所、記録にみられない神籠石系山城は16カ所、合計22カ所の古代山城が確認されている。

そしてこれらの古代山城の調査・研究はそれぞれ進展状況に違いはあるものの、それなりに進んでおり、その内容についても徐々に明らかになりつつある。

そのようななかで、城壁が推測される場所で確認できず、もともと築かれていなかった、未完成であったのではないかと推測される山城の存在が改めて知られるようになってきた。このような指摘はすでに筑後女山神籠石や讃岐城山城跡などに関して指摘されていたが(石松1976・松本1976・佐田1982など)、近年単に未完成なのではなく、「見せる城」という考え方で、見える部分だけ築こうとしたという考え方も提示されるようになっている(向井2010a・b)。

小稿ではこのような広義の「未完成の城」について検討するとともに、「完成した城」と「未完成の城」の意味について改めて検討してみたい<sup>(2)</sup>。

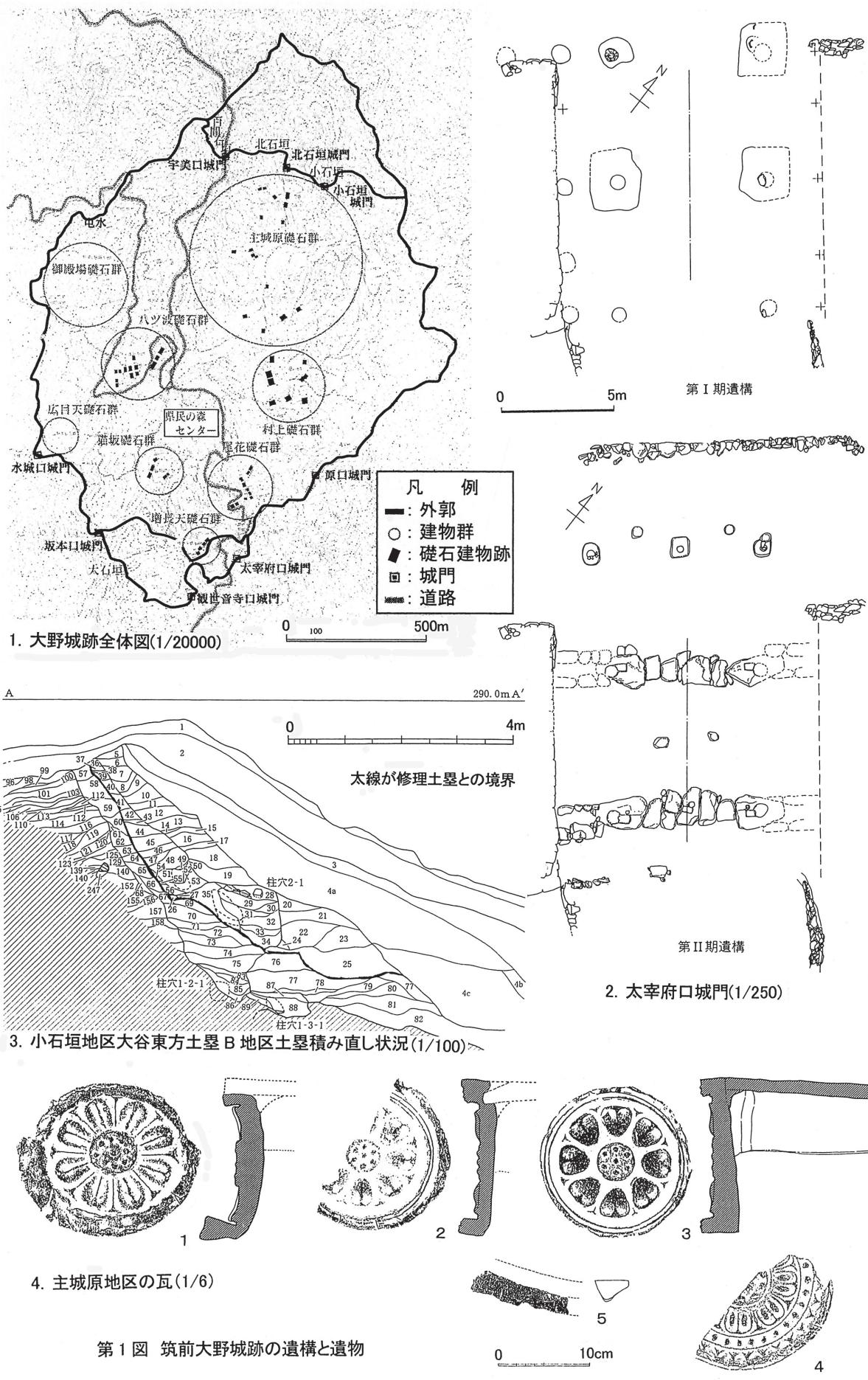
## 2. 完成していたと思われる古代山城

これまでの発掘調査などによって城壁がほぼめぐらされていたと思われる山城は筑前大野城跡、肥前基肄城跡、肥後鞠智城跡、対馬金田城跡、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石などである。

### (1) 筑前大野城跡

筑前大野城跡は福岡県大野城市・太宰府市・宇美町に位置する(第1図:鏡山1968、入佐・小澤編2010など)。最高所標高410mの四王寺山の峰々に土壘をめぐらせており、南北で部分的に二重になり、城周約6.8kmの土城である。

大野城に関しては、『日本書紀』天智天皇4(665)年8月条に百濟の達率憶禮福留と達率四比福夫が基肄城とともに築いたことが記されている。そして『続日本紀』文武天皇2(698)年5月甲申条に「大宰府に



第1図 筑前大野城跡の遺構と遺物

命じて、大野・基肄・鞠智の三城を繕治（修理）させた」とあり、築城から33年で修理させていることがわかる。

8世紀以降の大野城に関しては、記録の上では『扶桑略記』宝亀5(774)年条に大宰府に対して「高顯淨地」に「四王院」を建てさせる記事があり、『類聚国史』延暦20(801)年と大同2(807)年条にこの四王院が大野山（四王寺山）にあったことが記されている。

その後『類聚三代格』巻18、天長3(826)年11月3日太政官符に大宰府の兵士を廃し、選士1720人、衛卒200人を置いたこと、この衛卒の多様な雑役の一つに「大野城修理」が記されている。また『類聚三代格』・『続日本後紀』承和7(840)年条に大野城の管理者である大主城1員を廃したことが記され、『類聚三代格』巻18、貞觀12(870)年5月2日太政官符に、大野城の器仗を大宰府の府庫の器仗に準じて検定させたことが記され、『類聚三代格』巻18、貞觀18(876)年3月13日の太政官符に大野城の衛卒40人の糧米を城庫に納めさせたことが記されている。これ以後大野城に関する記録はよくわかっておらず、9世紀後半にはその機能が徐々に弱体化していたことが推測される。

しかし、一方で四王院に関する記録は見られ、戦国時代には大野城跡の南側に中世山城である岩屋城が築かれる。

考古学的な成果としては、城壁は基本的に土塁で構築され、一部百間石垣や大石垣などの石塁が谷部に存在することがわかっている。これまでの発掘調査を含め、城壁が全周することは間違いないようである。また尾花土塁地区A区や小石垣地区大谷東方土塁B地区などで版築土塁の崩落・修復工事痕跡が確認されている（第1図3、入佐・小沢2010下巻p.458）。門はこれまで8カ所確認されていたが、2012年にクロガネ岩門が確認され、9カ所となっている。太宰府口城門では掘立柱建物の門から礎石建物の門への変遷が確認されている（第1図2）。

城内に関しても、掘立柱建物4棟、礎石建物約70棟などが確認されている。

遺物は土器類では7世紀後半、8世紀、9世紀以降の須恵器や土師器、13～14世紀頃の青磁・白磁など、瓦では7世紀後半～8世紀のものと、数はあまり多くないようであるが、平安時代の瓦も出土している。

以上のように考古学的資料と文字史料からはひとまず大野城は665年に築城され、698年に繕治され、8世紀代は門の改築もはじめ、きちんと維持管理されるが、9世紀中葉頃にはやや城の機能が弱体化したようである。

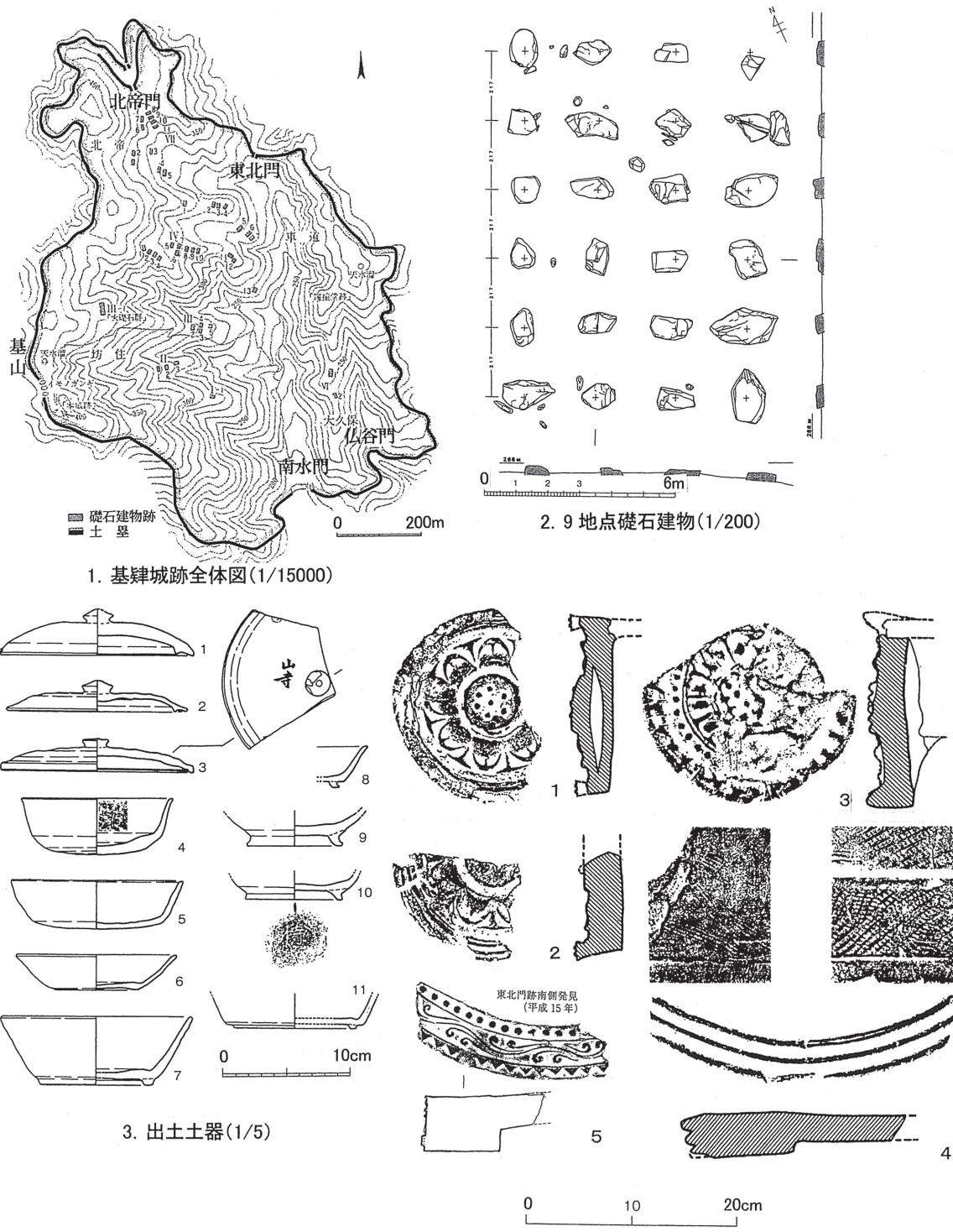
## （2）肥前基肄城跡

肥前基肄城跡は佐賀県基山町と福岡県筑紫野市に位置する（第2図：鏡山1968、田平1983、小田2009・2011など）。標高404mの基山から東に傾斜する地形を利用して土塁がめぐらされており、城周約3.9kmの土城である。城内最高所は標高414mである。

基肄城に関しても大野城と同じように、『日本書紀』天智天皇4(665)年8月条に百濟の達率憶禮福留と達率四比福夫が大野城とともに築いたことが記されている。そしてこれも同じく『続日本紀』文武天皇2(698)年5月甲申条に「大宰府に命じて、大野・基肄・鞠智の三城を繕治（修理）させた」とあり、築城から33年で修理させていることがわかる。

直接的に築城などに関わるものではないが、『万葉集』巻8-1472に基肄城のことが記されている。式部大輔石上堅魚朝臣の歌であるが、その左注に、神亀5(728)年、石上堅魚が大宰師大伴卿の妻大伴郎女の死に際して大宰府に行き、役目が終った後に駅使や府の諸卿大夫たちと「記夷城」に登って望遊して詠んだ歌であると記されている。

そして、大宰府政庁跡南側の不丁地区官衙遺跡において天平年間（729～748年）ころと推測される木簡が出土している。木簡には「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稻穀隨大監正六位上田中朝□□」とあり、基



第2図 肥前基肄城跡の遺構と遺物

4. 出土瓦(1/6)

肄城に貯蔵されていた稻穀が筑前・筑後・肥の国に運ばれたことがわかる（九州歴史資料館 1987）。また『日本紀略』弘仁 4（813）年条に「基肄団」（基肄軍団）の記録が見られる。

考古学的な成果としては、城壁は基本的に土塁で構築され、門は 4 カ所推測されており、南門部分に石塁が使用されているほか、東南門（仏谷門）推定地も一部石を使用している。このほか、北帝門では土塁が二重に築かれている。南門の石塁部分に関しては、最近解体工事が進められ、これまで知られていた大きな通水口のほか、小型（他の山城では一般的な大きさ）の排水口が 3 カ所確認された。城壁は基本的に全周しているものと考えられている。

城内の施設に関しては、掘立柱建物は未確認で、礎石建物が約 40 棟確認されており、その周辺で 7 世紀後半～8 世紀の瓦や土器が出土し、土器は 9 世紀に入るのも一部確認されている。

基肄城の城機能の停止時期に関してはよくわからないが、考古学的には 9 世紀頃のようである。

### （3）対馬金田城跡

対馬金田城跡は長崎県対馬市美津島町黒瀬および箕形に位置する（第 3 図：田中・古門編 2000・2003、田中編 2008・2011、亀田 2012 など）。標高 276.2m の城山を最高所として東に下がる斜面部に城壁がめぐらされている。城壁は石塁で、全周している。城周約 2.8km の石城である。

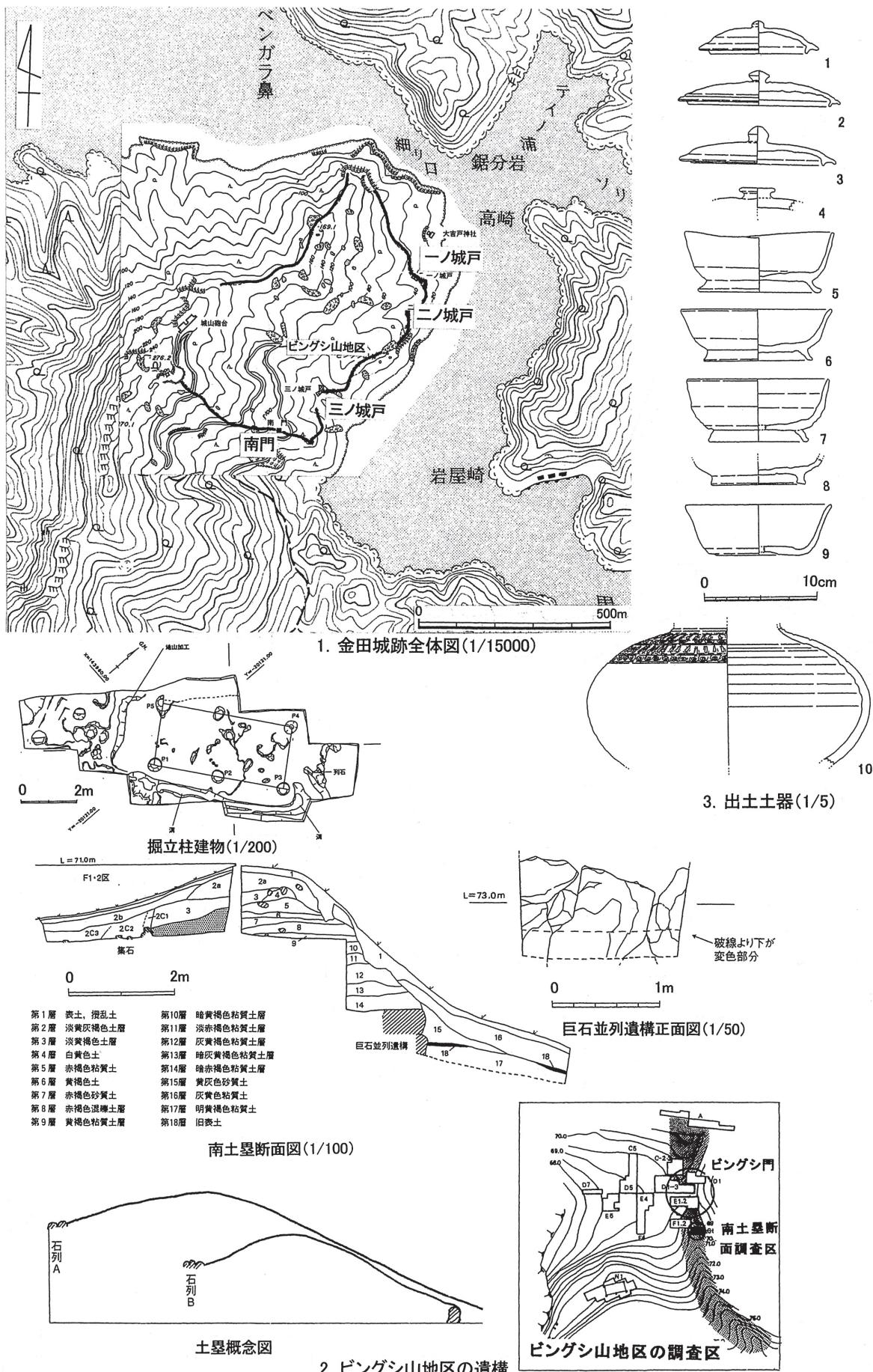
『日本書紀』天智天皇 6（667）年 11 月条に、倭国高安城、讃吉国山田郡屋嶋城とともに築かれたことが記されている。金田城に関する記録はこれだけで、築城後の城の様子などはわかっていない。

城壁は基本的に石で築かれているが、築きやすい場所だけでなく、険しい崖部にも石を積み上げており、かなりしっかりと全周城壁をめぐらせたことがわかる。また二ノ城戸の石塁線の内側（ビングシ山地区）で土塁が確認されている。門はこれまで内側の土塁で 1 カ所、外側の石塁で 3 カ所、合計 4 カ所確認されている。城壁線の標高は、東側城壁線の中央やや北寄りに位置する二ノ城戸付近が最も低いようで、約 21m である。城内には小型の掘立柱建物が 5 棟確認されているが、大野城跡などのような礎石建物は確認されていない。鍛冶遺構も確認されている。

遺物は、瓦は出土しておらず、7 世紀前半から末頃の土器が出土している（第 3 図 3）。そのほか鍛冶関係遺物、温石などが出土している。

このような遺物のあり方から、667 年の築城後、大野城・基肄城・鞠智城などのような大幅な瓦を使用する（？）繕治はなされず、8 世紀初め頃にはその機能を停止したのかもしれない。

ただ、二ノ城戸の城内で確認されている土塁に関しては、作り直しが確認されており（第 3 図 2）、そのビングシ門の新しい土塁に伴う門礎石は外郭線の石塁の門に伴う礎石と同じ形態のものである。この状況をそのまま判断すると、内側土塁の新しいものと外郭線石塁が同時期となり、内側土塁の下層のものは外郭線石塁より古いことになる。つまり設計変更などが存在したものと考えざるを得ない。もし下層土塁が 667 年の築城当初のものであるならば、そのときは掘立柱式の門を建て、7 世紀末頃（？）の建て直しのときに礎石立ちの建物に変え、そのときに現存する門礎石を使用したものと想定される。そしてその 7 世紀末頃（？）の建て直しの時に外郭城壁線が完成し、その門に同じ門礎石を使用して門を建てたのか、それとも石塁の外郭城壁線はすでに初築時から存在するが、門のみは掘立柱式で、7 世紀末頃の建て直しのときに門の床面を石敷きにし、礎石を置き、礎石建物の門にした可能性も考えられる。そうすると現在確認されている外郭線の南門、三ノ城戸、二ノ城戸はいずれも 7 世紀末頃の立て直された礎石立ち門の跡となる。そして石敷きの下層に掘立柱建物の門の痕跡が残っている可能性があることになる。ただ、筆者は今その建て直し時期を仮に 7 世紀末頃としたが、それはこれまでの出土遺物が現状では 7 世紀末頃までに収まるからである。もし今後門の周辺で 8 世紀以降の土器などが出土するならば、その建て直しの時期も変更されることになる。一方で、下層土塁が 667 年よりも古い可能性も当然無視はできない。



第3図 対馬金田城跡の遺構と遺物

このように大野城、基肄城、鞠智城のような 698 年の繕治、8 世紀の大規模な改修などはよくわかってないが、ビングシ山地区における土壘の修築は確認されている。

#### (4) 肥後鞠智城跡

肥後鞠智城跡は熊本県北部の山鹿市と菊池市にまたがって位置している(第 4 図:西住ほか編 2012 など)。海岸線からはやや離れており、菊池平野を南に望む標高 145 m の米原台地を中心に築かれている。城周約 3.5km の土城である。

築城に関しては記事が見られないので正確な年代はわかつてない。鞠智城が文献に初めてみられるのは、前述の大野城・基肄城とともに繕治させるという『続日本紀』文武天皇 2 (698) 年の記事である。その後奈良時代の記録はなく、『日本文徳天皇実録』天安 2 (858) 年閏 2 月丙辰 (24 日) 条に、菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴り、同丁巳 (25 日) 条に、また鳴ったとあり、同 6 月己酉条に菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴り、その不動倉 11 室が火事になったと記されている。そして『日本三代実録』元慶 3 (879) 年 3 月 16 日条にも肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が自ら鳴ったと記されている。これ以後の記録は見られない。

そして年号は記されていないが、城内北部の貯水池跡で「秦人忍口 (米カ) 五斗」と記された木簡が出土している。共伴土器は 8 世紀第 1 四半期のものである。

考古学的には、土壘と崖線によって城壁が築かれている。門跡は 3 カ所あり、地形からみて北側に少なくとも 1 カ所は門が推測される。

城内では八角形建物をはじめとする 72 棟の建物が確認されており、掘立柱建物と礎石建物があり、倉庫と兵舎が想定されている。また城内北部に貯水池跡が検出されており、そこで前述の木簡や百濟から持ち込んだのではないかと推測されている銅造菩薩立像などが出土している。

遺物は、上記の珍しいもののほかに土器、瓦が出土している。土器は築城以前の 7 世紀前半のものから、築城時の 7 世紀後半のものがややあり、そして 7 世紀末～8 世紀初頭のものが最も多く、8 世紀中葉頃のものは確認できておらず、8 世紀末頃に再び増加し、9 世紀前半代は極めて少なく、9 世紀中葉から後半に再び増加し、10 世紀前半は基本的にみられず、10 世紀半ばから後半にかけてのものがわずかにみられる(第 4 図 5)。このような土器の量的な変化から 7 世紀後半に築城され、文武天皇 2 (698) 年の繕治記事に該当する 7 世紀末～8 世紀初に本格的な整備がなされ、その後 8 世紀中葉前後の空白、8 世紀末の再利用、9 世紀中葉～後半の再利用が推測されている。

また、瓦でも同じように 7 世紀後半～8 世紀初のものがまとまっており(第 4 図 4)、次に 8 世紀末頃に長者山地区などで縄目瓦を使用した建物が造営されたようである。

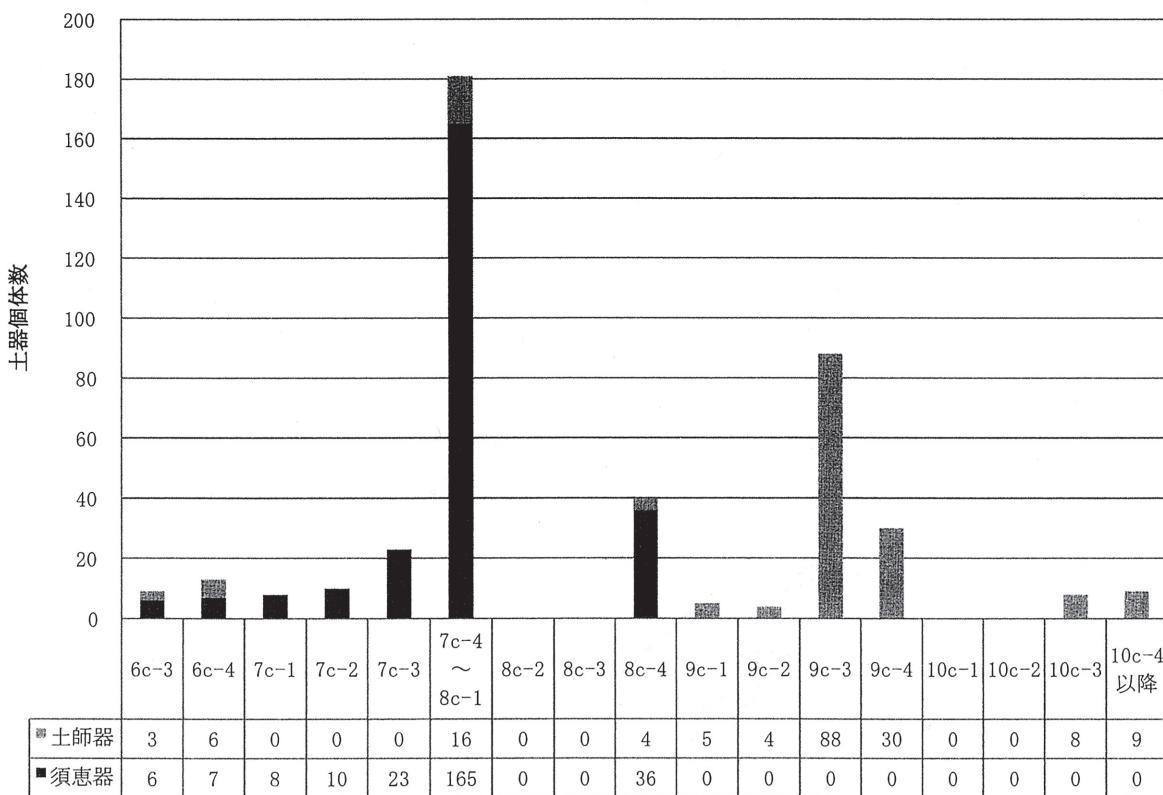
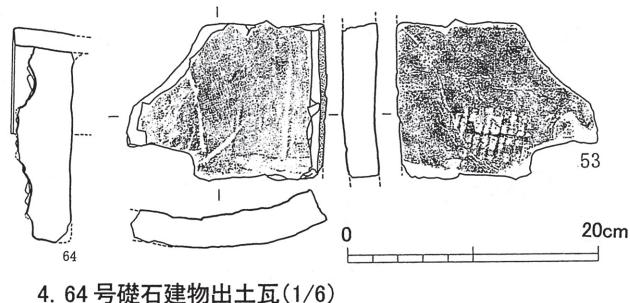
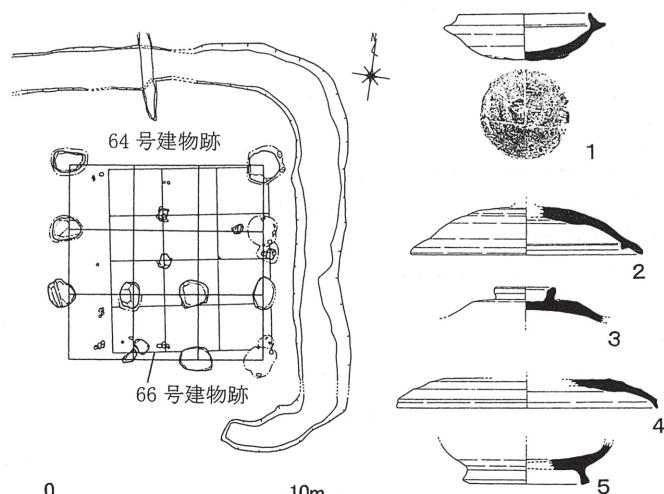
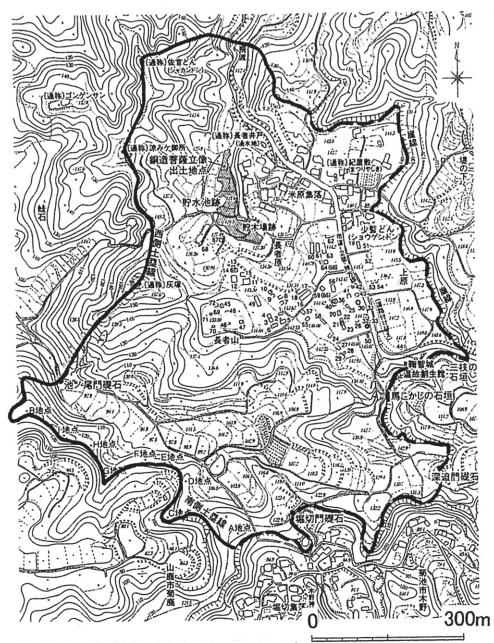
このような土器や瓦のあり方は記録の内容ともおおよそ合致しており、7 世紀後半に築城され、一部 10 世紀中頃に使用されたようではあるが、9 世紀後半にはほとんど使用されなくなったようである。

以上のように、鞠智城に関しては、築城記事はないが、大野城や基肄城とほぼ同じ頃に造営されたものと推測され、9～10 世紀には使用されなくなったようである。

#### (5) 備中鬼ノ城

備中鬼ノ城は岡山県総社市奥坂に所在する鬼城山(標高 396.6 m)に位置する(第 5 図:高橋 1976、鬼ノ城学術調査団 1980、総社市教育委員会 2005、村上・松尾 2005、松尾・谷山 2006、岡田・亀山 2006、金田・岡本 2013)。南に下がる斜面部に城壁がめぐらされた城周 2790 m の土城である。この山城に関する古代の記録はない。

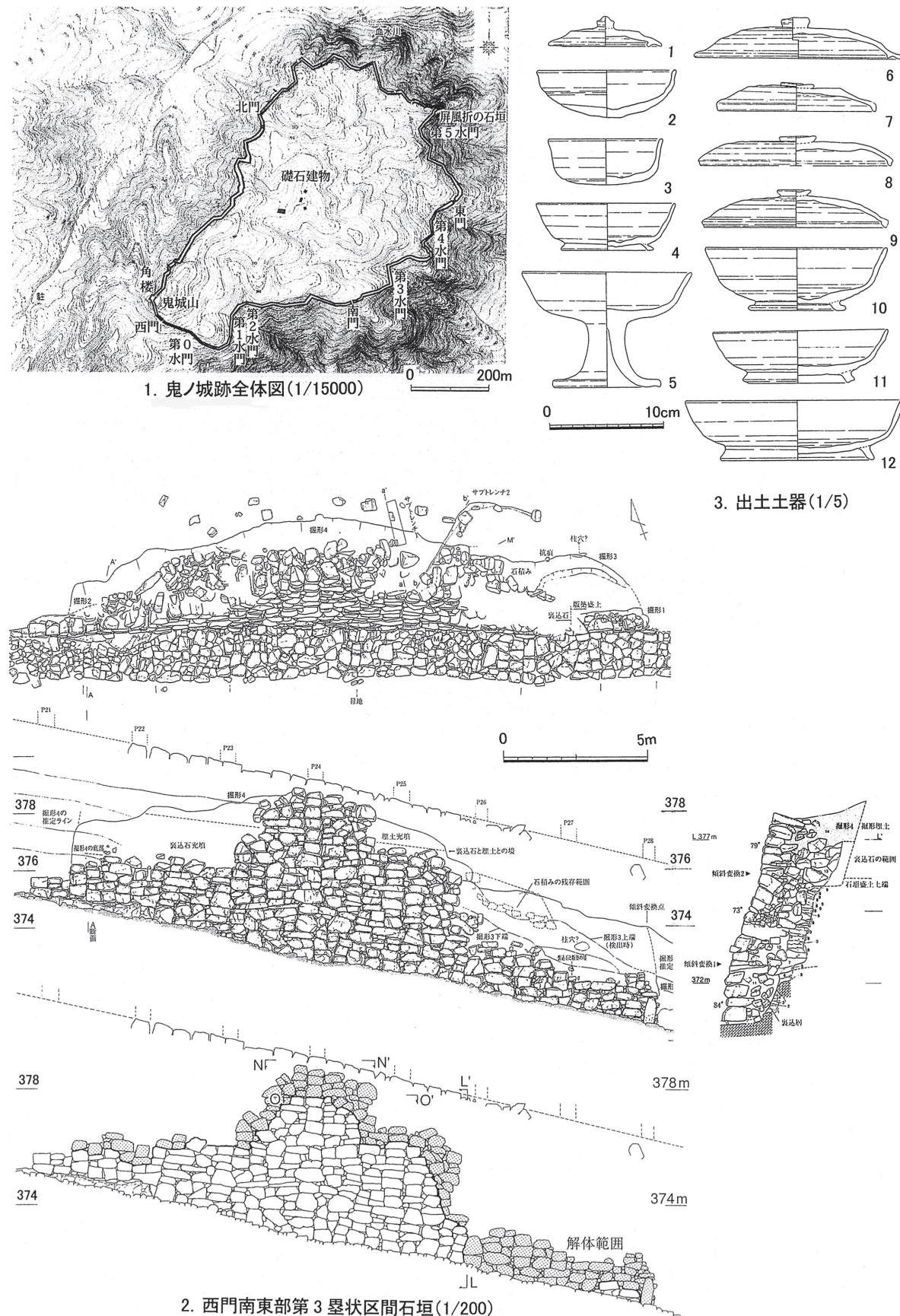
城壁は基本的に版築の土壘で築かれているが、一部石壘で築かれており、一般的な印象としては石城のイメージが強いようである。城壁は全周しており、城門が 4 カ所、通水口をもつ水門が 5 カ所、城内に礎石建物が 7 棟、土手を持つ貯水施設が 2 カ所確認されている。また鍛冶場が確認され、7 世紀後半の土器が



5. 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図

第4図 肥後鞠智城跡の遺構と遺物

古代山城は完成していたのか



第5図 備中鬼ノ城跡の遺構と遺物

出土している。西門南東部第3墨状区間のいわゆる高石垣については、筆者は石垣の正面觀における上部の石の積み具合の不揃い、石垣背後の掘方、裏込めの状況から少なくとも一度、そして一部は修築されたのではないかと考えている（第5図2）。4カ所の城門には方形と円形の割り込みをもつ唐居敷が使用されており、いずれも軸摺穴、方立用の穴があけられている。

出土土器は、一般的な杯類がほとんどであるが、円面硯、転用硯、鍛冶関係遺物、瓦塔、水瓶、隆平永寶などが出土しており、時期的には7世紀後半から8世紀前半、そして9世紀から11世紀のものに区分され、前者が山城関係、後者は宗教関係のものと考えられている（第5図3）。

つまり、鬼ノ城は7世紀後半に築城され、8世紀前半まで使用されるが、城としての機能はこの頃なくなり、9世紀からは宗教施設して使用され、これが後の新山寺へつながる可能性が考えられている。

このように鬼ノ城は、城壁は完周し、門も構築され、城内に礎石建物などの施設があり、さらに城壁の修繕の可能性もあり、完成した城といって良いと思われる。

#### （6）豊前御所ヶ谷神籠石

豊前御所ヶ谷神籠石は、福岡県行橋市とみやこ町にまたがり、標高246.9mの御所ヶ岳（ホトギ山）から西に延びる尾根線と北に延びる斜面を取り囲んで築かれている（第6図：小川2006・2010など）。城周約3030mの土城である。この山城に関する古代の記録は確認されていない。

基本的に基部に列石を配した土塁で囲まれているが、中門から見張りと呼ばれている間の北西部約600mは土塁のみで列石がない。また第2東門付近から第2南門付近までの南東部約1kmは地形の急峻さをそのまま利用しているのか、土塁が確認されていない。そして中門から西側で現在確認されている土塁線の内側で未完成の土塁線が確認されている。これは工事途中で設計変更がなされ、現在確認されている北西部の土塁線に変わったものと考えられている。

門は7カ所確認されており、北側の西門と中門は大きく、切石加工の石材を積み上げた石塁に挟まれている。第2東門は発掘調査されたが、門の建物は確認できておらず、外から中に入ると土の壁が正面に見える状況で、このような門であるのか、それとも未完成なのか気になる。またそのほかの門でも現時点では明確な門の建物痕跡は確認できていない。

以上のように南東部の土塁未確認区間を急峻な自然地形利用による不施工区間とみるのか、未完成とみるのかで意見は分かれるが、自然地形を利用した不施工区間と考えれば、城壁は基本的に全周していることになる。ただ、この土塁未確認区間を未完成の場所だと考えると、城全体としては未完成となる。また北西部の列石を持たない土塁区間は調査者の小川秀樹が推測するように、工事途中での設計変更によると考えることは可能であると思われる。

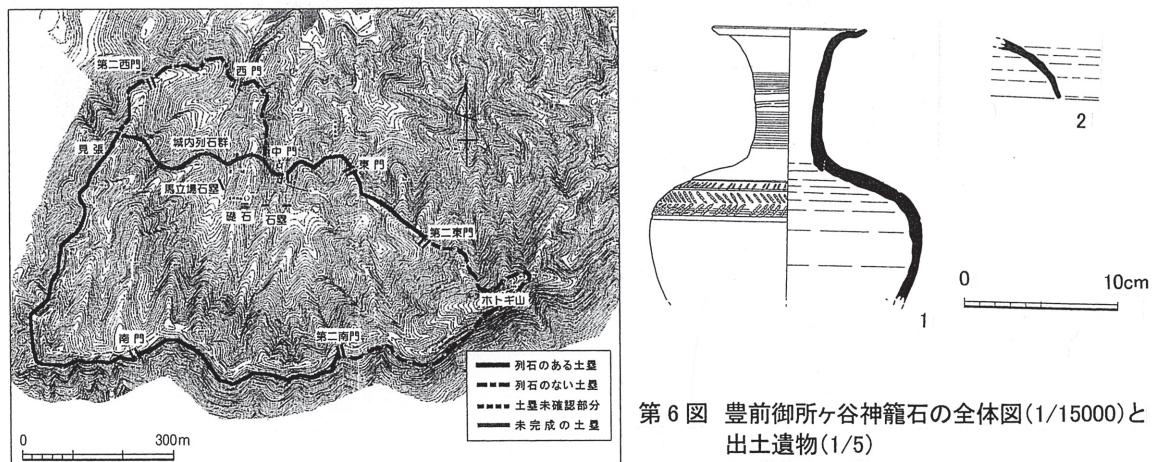
城内の施設としては、列石切石を転用した礎石建物があり、古代の建物である可能性が考えられている。そのほか発掘調査はなされていないが、貯水施設、城内谷部の石塁遺構、石切場などが確認されている。これらの内部施設に関しては当然今後の検討が必要であるが、備中鬼ノ城の内部施設との類似が考えられる。

遺物は、瓦は出土しておらず、土器は7世紀後半（第3四半期？）頃の須恵器長頸壺や7～9世紀頃の土師器などが出土している。

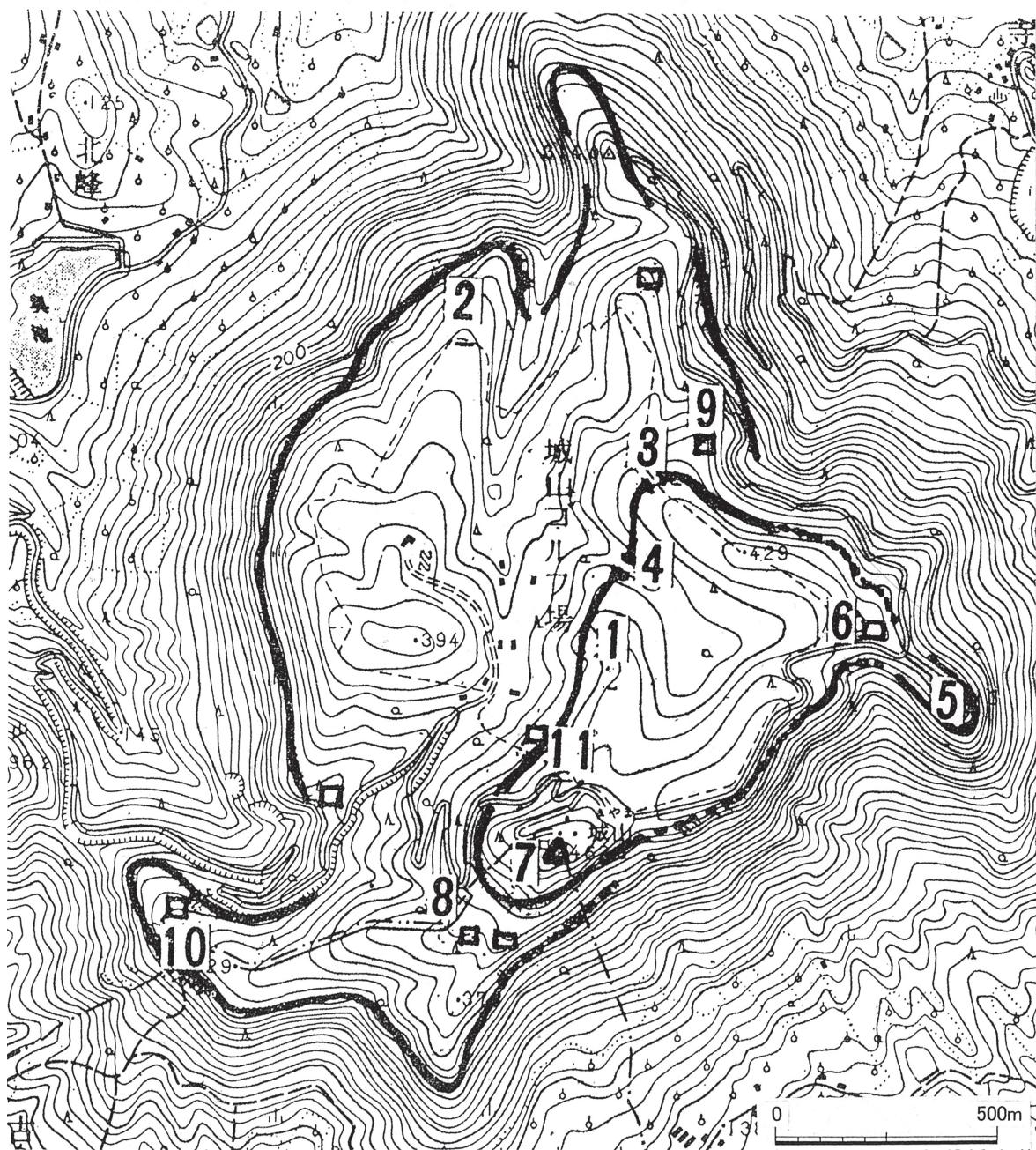
遺物によって御所ヶ谷神籠石の変遷を考えると、現時点では7世紀後半に築造されたことはわかるが、8世紀以降は不明である。

以上のように、御所ヶ谷神籠石に関しては、ひとまず完成していると考えることができる。今後門の施設などが発見されれば、その完成度がより増すことになる。

古代山城は完成していたのか



第6図 豊前御所ヶ谷神籠石の全体図(1/15000)と出土遺物(1/5)



第7図 讃岐城山城跡(1/15000)

## (7) その他

以上、述べてきたもののほかに完成していたのではないかと考えられているものとして、備前大廻小廻山城がある。少なくとも城壁線（土壘・列石）は全周していると考えられている（出宮・乗岡 1989）。ただ、西側の門が想定される一木戸北側は発掘調査を行ったが、現在の山道で削られているよう、その痕跡を確認できていない。また伊予永納山城も完成した城と考えられているが、残りの悪い部分では本来のような状況であったのかは確認できていない（渡邊・半沢 2005、渡邊編 2009、渡邊 2012）。門跡に関しては、北西部に開口する大きな谷部に想定され、一部調査も行われたが、主な部分が鉄道で壊されており、確認できていない。

## 3. 未完成の可能性がある古代山城

### (1) 豊前唐原山城跡

唐原山城跡は福岡県築上郡上毛町下唐原・土佐井に位置し、標高 83.5m を最高所とする低丘陵に築かれている（第 8 図 1：末永 2003・2005）。城周約 1700 m と推測されている。この山城に関する古代の記録はない。

土壘は基本的に確認されていない。第 3 水門付近に一部確認されているが、これは完成した一般的な土壘ではなく、工事途中の一時的なものと考えられている。第 8 図 1 の北・東の実線部分は列石を並べて土壘を構築するための段状加工が行われた部分で、西側の点線部分はそれさえ確認できていない部分である。南東部では斜面の段状加工と列石の部分的設置などは確認できるが、少なくとも版築土壘の構築は確認できていおらず、さらに想定列石線から外れた場所にある石材が当時の地山面に置かれてであることから、これらは工事途中の状況を示しているものと推測されている。

水門は 3 カ所確認されており、石築部分はひとまずできあがったものと考えられている。しかし、その上部に土壘があるのであれば、その土壘は未確認であり、水門石築部にとりつく土壘や列石もよくわかつていない。門跡も確認できていない。

また、第 3 水門の内側で確認されている礎石建物については、礎石自体がやや小型であり、下層の掘立柱建物（？）もよくわかつていないことから、山城と関わる可能性、別のものである可能性両者が考えられている。

出土遺物は 7、8 世紀の須恵器が出土している。

以上のように、唐原山城跡はこれまで確認されている朝鮮式山城・神籠石系山城の中で最も未完成な山城の一つと推測される。

### (2) 筑前阿志岐城跡

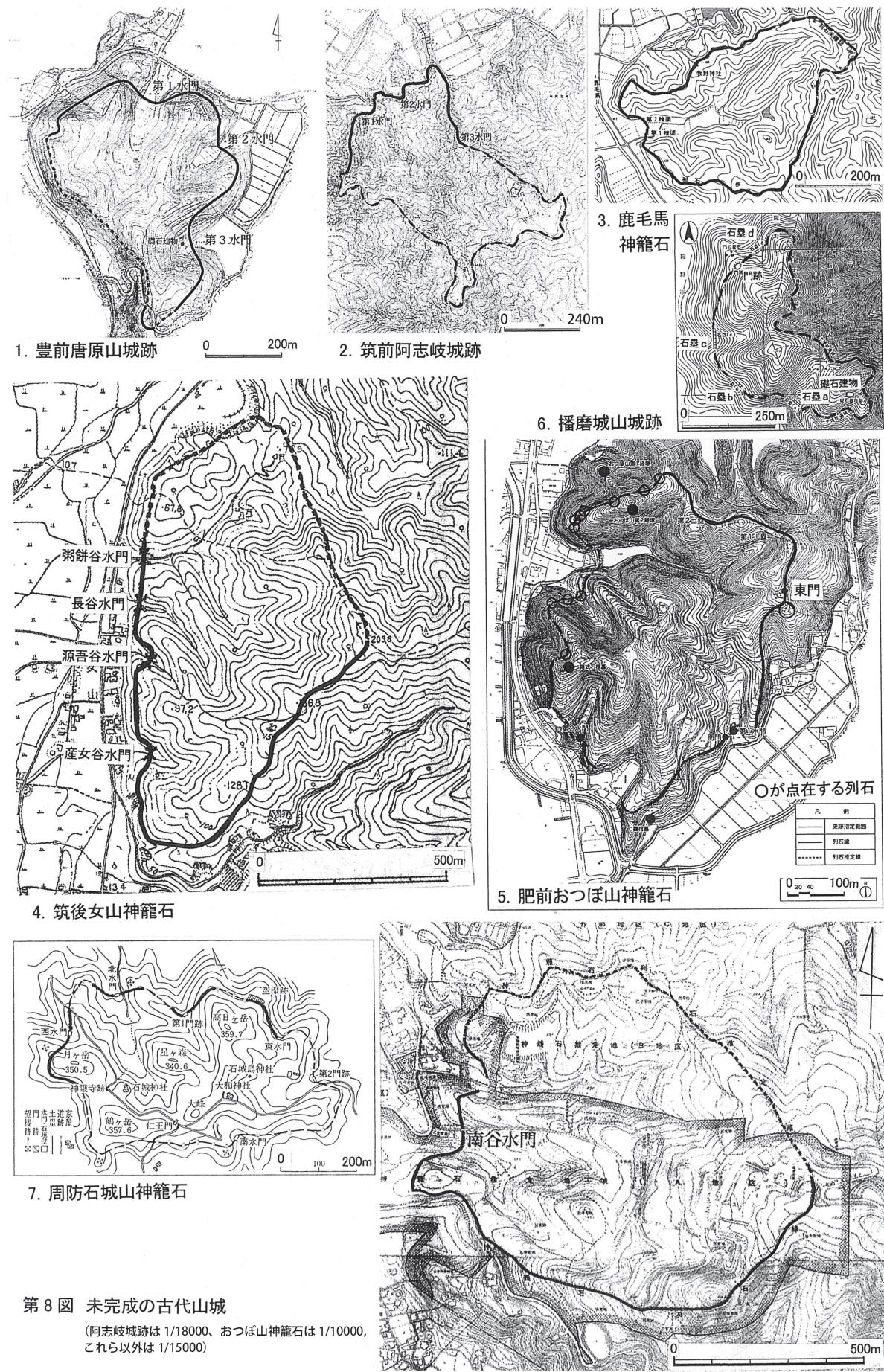
阿志岐城跡は福岡県筑紫野市阿志岐に位置する標高 338.9 m の宮地岳北西側山腹に築かれている（第 8 図 2：草場編 2008・2011）。城周約 3.68km と推定される土城である。『日本書紀』などにはその記録は確認されていない。

城跡は列石を持つ土壘、石壘、3 カ所の水門などが確認され、北東面側は第 3 水門までは土壘は確認できるが、その南側では確認できず、北西側では最も西側に突出した標高約 200 m 地点近くまでは確認できるが、そこから南側に関しては確認できていない。その確認できた長さは約 1.34km である。つまり想定城域の北側約 1/3 のみである。このように城壁は全周しないと考えられている。

門跡はよくわかつていないようである。城内の建物などについてもわかつていない。

出土遺物は 8 世紀代の須恵器がある。

## 古代山城は完成していたのか



8. 筑後高良山神籠石

### (3) 筑前鹿毛馬神籠石

鹿毛馬神籠石は福岡県飯塚市鹿毛馬、標高約 75 m の低丘陵部に築かれている（第 8 図 3：井上・宮小路 1984、須原 1998）。城周約 2km の土城である。この山城に関する古代の記録はない。

城跡は最高所の丘陵東側を起点として西側に三角形状に下がりながら広がる、列石を伴う土壘で囲まれたものである。西側の水門付近が標高 14 ~ 15 m で、城外の高さとほとんど変わらないところに門が築かれていることで有名である。ただ、門自体はその想定場所を発掘したが、現在使用されている道があることもあり、柱穴などは確認できていない。

城壁線は基本的に切石列石を伴う土壘で築かれているが、東側山頂付近では約 300 m の範囲で列石がみられず、その周辺の城壁想定ラインからやや離れた場所で切石加工した石材が見られた。この山城も道路に面したであろう西側の城壁は築かれているが、東側の奥の方は築かれてい可能性が推測されている。

出土遺物は、水門裏側の取水に関わる遺構で 7 世紀代のものと推測される須恵器甕片などが出土している。

### (4) 筑後女山神籠石

女山神籠石は福岡県みやま市瀬高町大草女山の標高 203.6 m を最高所とする西向き丘陵部に位置する（第 8 図 4：石松 1976、磯村 1978、川述 1982、猿渡 2013）。城周約 3km と推定される土城である。この山城に関する古代の記録は確認されていない。

東側の最高所から西側斜面に沿って扇状に広がる尾根部と西側標高 40 ~ 45 m の山腹に列石や土壘が確認され、水門が 4 カ所確認されている。ただ、正確にはこの東側山頂部のすぐ東側から北側と西面土壘線の最も北側に位置する粥餅谷水門の間は、地形によって城壁線が推測されているが、土壘・列石は未確認で、昭和 46 年の福岡県教育委員会による発掘調査でも 10 カ所ほどのトレーニングを入れ、確認したが、土壘・列石は確認できていない。

つまり西面土壘線の最も北側に位置する粥餅谷水門から南側は土壘・列石が確認されているが、北側約 1/3 は城壁線が未確認なのである。また城内南東部に位置する山内 2 号墳と城壁線の間にトレーニングを入れ、その関係を調査したが、列石線の裏側に版築状の土層は確認できたが、土壘の存在は確認できていない。また古墳と土壘の前後関係などもわかっていない。

神籠石に関わる出土遺物は明確ではない。ただ、前述の山内古墳群などで 6 世紀後半～7 世紀前半の須恵器を出土する横穴式石室墳の古墳群が確認されている。そして列石から北約 6.5 m に位置する 2 号墳の石室中心から約 9 m の場所で 7 世紀後半の須恵器蓋が出土している。これが古墳の追葬に関わる資料のかか神籠石に関わる資料なのかよくわからないが、興味深い資料である。

### (5) 肥前おつぼ山神籠石

おつぼ山神籠石は佐賀県武雄市橋町大日のおつぼ山に位置する（第 8 図 5：鏡山ほか 1965、武雄市教育委員会 2011）。城内のほぼ中央部に位置する標高 66.1 m 地点を最高所として、土壘・石壘が確認され、城周 1870 m の土城である。この山城に関する古代の記録は確認されていない。

おつぼ山神籠石の土壘・列石は想定されるすべての場所では確認されていない。昭和 38 年に発掘調査がなされているが、第 2 土壘とよばれる北東部の土壘から東側の東門、南東部の第 1 水門、南門を経て城壁南端付近までは基本的に土壘・列石は残っている。しかし、推定城壁線の西側に関しては、第 2 水門、そのやや西北側の一部で土壘・列石が確認できるが、それ以外の場所では点的に列石や土壘状の痕跡を確認できる程度であり、少なくとも城壁線が全周していることはない。また、東門の外側や内側に加工された石材がまとまって点在している。東門関連で余った石材なのか、それとも使用しようとしていた石材なのかはわからないが、関連するものと推測される（第 8 図 5 の○が点在する列石の場所）。

また、この東門は発掘調査で柱穴が確認された数少ない神籠石系山城の門である。ただこの柱穴に關

して、東門土壘の版築工事用の支柱ではないかとの考え方、門の柱と工事用支柱を兼ねたものとの考え方も出されている<sup>(3)</sup>。

出土遺物に関しては、山城の時期を推測させるものは確認できていない。

#### (6) 播磨城山城跡

播磨城山城跡は兵庫県たつの市新宮町馬立などに所在する標高 458 m の城山を中心に築かれている（第 8 図 6：加藤ほか 1988、加藤 1995）。土壘などの城壁は確認されていないが、約 1600 m の城周が想定されている。この城に関する古代の記録はない。

遺構・遺物としては、方形削り込みの唐居敷（第 9 図 2）、塊石を使用した谷部の石壘、そして礎石建物（4 × 7 間）などが確認されている。ただ、唐居敷には軸摺穴が開けられておらず、軸摺穴を使用しない門扉構造の唐居敷なのか、それとも未完成の唐居敷なのかよくわからない。このような軸摺穴をもたない方形削り込み穴の唐居敷は周防石城山神籠石と讃岐城山城跡にみられる。ただ讃岐城山城跡では方立を持たないもの、さらに方形の柱用の削り込みも貫通していないものがあり、少なくとも讃岐城山城跡の唐居敷については未完成品が存在することは間違いないようである。

出土土器は 7 世紀末～8 世紀代のものが採集されている。

この城はその後、平安時代に寺院または城として使用され、南北朝時代・室町時代には赤松氏の拠点的な城として使用されている。前述の礎石建物に関しては、山城関係の可能性もあるが、平安時代の遺構である可能性も推測される。

城壁に関しては、現地で義則敏彦氏にご案内いただき、見学したときにはその存在は確認できず、築かれていたかどうかわからなかった。筆者としては、谷部に築かれた石壘と石壘の間に土壘が確認できず、もともと築かれていなかつたのではないかと推測している。

つまりこの播磨城山城跡に関しては、谷部の石垣、未完成（？）の唐居敷などはあるが、明確な城壁は築かれていなかつたのではないかと推測している。

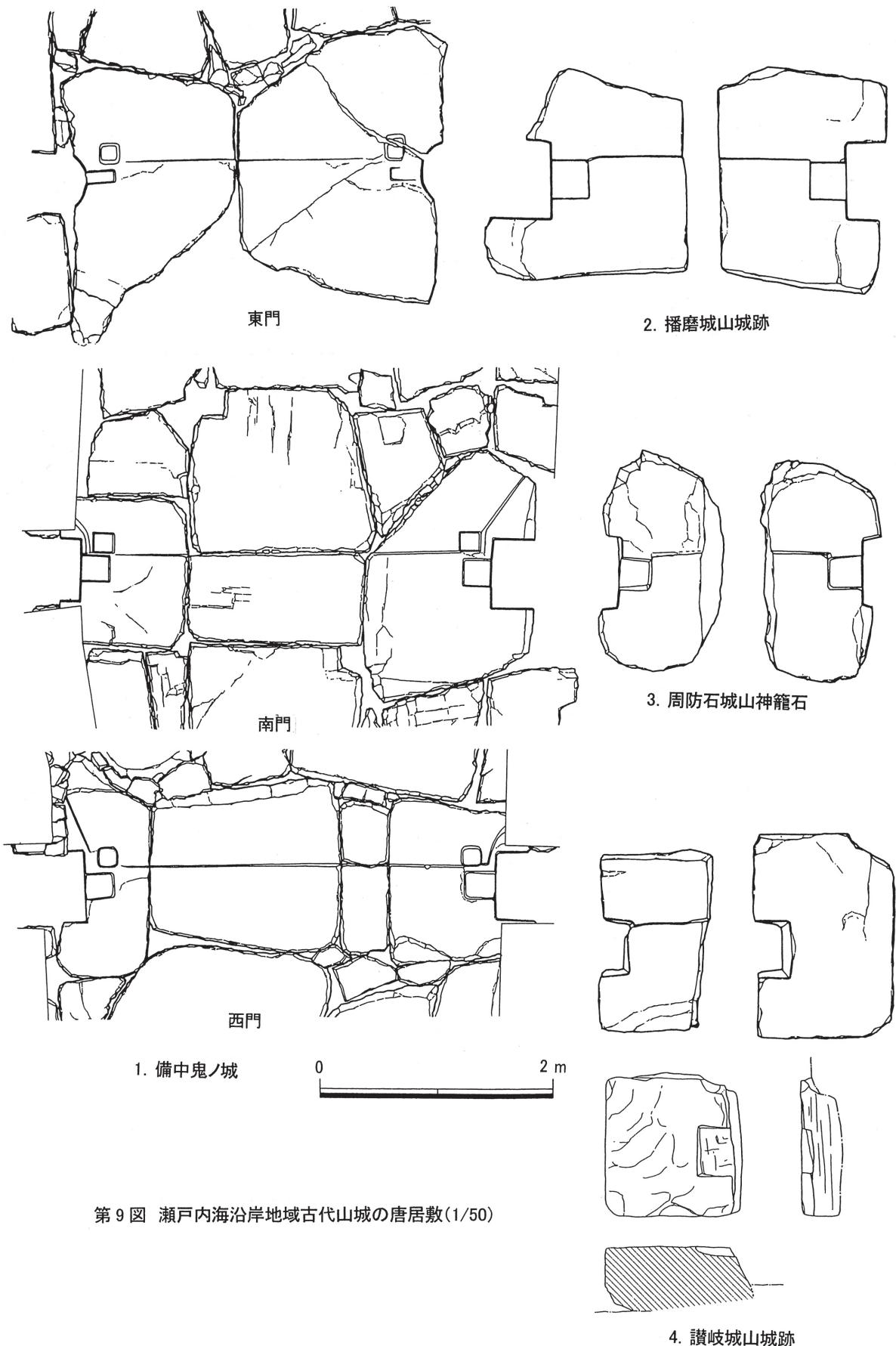
#### (7) その他

以上述べてきたもののほか、筑前杷木神籠石は土壘・列石が明確でない部分があり（宮小路ほか 1970）、筑後高良山神籠石も北側の城壁線はよくわかっていない（第 8 図 8）。ただ、これに関しては天武天皇 7(678) 年の地震によって壊れた可能性が提示されており（松村 1990・1994）、そうであるならば完成した山城かもしれない。ただ、現時点では未完成である可能性も無視できず、ひとまず城壁が確認できない城としてこちらに入れておく。今後の調査に期待したい。

このほかに、周防石城山神籠石は想定される城壁線において土壘・列石などが確認できていない部分があり、城壁が完全にめぐらされていたかどうかの調査検討が必要である（第 8 図 7、小野 1983、光市教育委員会 2011）。少なくとも北門（第 1 門跡）の方形削り込みを持つ唐居敷は軸摺穴が彫られておらず（第 9 図 3）、播磨城山城跡の唐居敷と同じように軸摺穴を作らないものであるのか、そうでなければ未完成の唐居敷である可能性が考えられる。同様に讃岐城山城跡も方形削り込みを持つ唐居敷が確認されているが、方立用の穴と軸摺用の穴がともに彫られていないものがあり、さらに方形の柱を支えるための方形削り込みが途中までしかあけられていないものもある（第 9 図 4）。少なくとも柱を支えるための方形削り込みが貫通していないものは未完成品と考えざるを得ず、讃岐城山城跡にはやはり完成していない門があると考えざるを得ない（古代山城研究会 1996）。

### 4. 完成した古代山城と未完成の古代山城

城壁はできあがっていたか 以上、古代山城のいくつかの例を見てきたが、大野城跡・基肄城跡・金田城



第9図 濑戸内海沿岸地域古代山城の唐居敷(1/50)

跡・鞠智城跡・鬼ノ城などのように城壁線が基本的に全周する完成したと考えられる山城と唐原山城跡・阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・女山神籠石・おつぼ山神籠石・播磨城山城跡などのように城壁の一部、またはかなりの部分が築かれていらない、未完成と考えざるを得ない山城が存在することを再確認した。

ただ、前者に関しても、すべて土塁などの城壁を築造していたのか、それとも急峻な自然地形の利用も含めて完成していると考えるのか、少し気になる点もあるが、基本的に城としての機能を維持できる城壁線の存在が推測できるものをひとまず完成したものと考えている。この明確な城壁線（土塁・石塁など）が確認できない部分に関しては、まったく何もせず、自然地形を利用しているのか、現時点では確認できないが、本来は土塁状のものや柵などの施設が築かれていたのかなど、今後検討が必要であろう。

また、未完成の山城においても、その城壁が確認できない部分が、まったくなんらの工事をしていないのか、城壁を築く途中であったのか、たとえば、山の斜面を加工し、石を並べる準備をし、土塁を作ろうとしていたのか、さらに、斜面加工の後、石をいくつか並べたが、土塁を作る前に止まってしまったのかなど、いろいろな様相が確認されている。このように、どのような状況で止まっているのかを確認することも、山城築造のあり方を考える上で大事な点であろう。

また土塁や石塁などの外郭線に付随するものとして門の存在も重要である。少なくとも完成した山城を考えている大野城跡・基肄城跡・金田城跡・鞠智城跡、そして鬼ノ城では唐居敷や礎石を持つ門跡が検出されており、門の建物ができあがり、外郭線はほぼできあがっていたものと推測される。また城壁の大部分を急峻な崖でまかなかったのではないかと考えられている讚岐屋嶋城跡では、西に面した立派な門が築かれている。ただ、屋嶋城跡に関しては、城壁線の検討が今後の課題である。

**城内施設** 古代山城研究においてよく取り上げられた城内施設の存在もこの完成・未完成と関わる可能性がある。つまり、城壁が完成し、兵士たちがその中で見張りや城の管理などを行っていたと考えるならば、当然それに関連する施設や建物群が必要となる。未完成の山城でも工事を進めるために作業小屋や石材切り出し場、石材加工のための道具である轍などの加工場（鍛冶場）などは当然必要であったと推測される。しかしこれまで古代山城において内部施設が確認されている例はやはり少ない。

完成したと考えられている古代山城では、掘立柱建物、礎石建物、鍛冶場、貯水施設などが確認されている。掘立柱建物も管理棟、兵舎、鍛冶場用の建物などがあり、礎石建物においても管理棟、倉庫、鼓楼などが推測されている。

一方、城壁が全周しない未完成と考えられている山城においては、城壁が築かれている部分に門が築かれたと考えられるもの（おつぼ山神籠石など）はあるが、城内施設に関してはほとんど確認されていない。いずれ築城工事に関わる掘立柱建物などが検出される可能性はあると思うが、完成後の管理棟や兵舎、そして倉庫などは全域を調査しても検出できないのかもしれない。

ただ、この「完成」も当初から、または築城途中の段階で急遽、これくらいの範囲に城壁さえ築けば、ひとまずの「完成」として、城内施設の造営にとりかかっているならば、そのような管理棟、倉庫などが今後発見される可能性は当然ある。

**いろいろな未完成** いずれにせよ、「未完成」にもいろいろな段階があることがわかった。

まず、城壁がほとんど築かれていないと考えられる豊前唐原山城跡や播磨城山城跡などはやはり、築城の意志はあったが、なんらかの理由で工事が「初期段階」で止まらざるを得なかったものと推測される。

筑前阿志岐城跡、筑前鹿毛馬神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石などはおもに官道などに面する部分だけが造られ、見えない部分については城壁が築かれていらない。向井一雄のいう「見せる城」である（向井 2010 b）。確かに見られることを意識して築いていると思われるが、おつぼ山神籠石のように見えない部分にも点的に列石用の石材が置かれているものがあるのも事実のようである（第8図5の○印）。つまり

りこのような途中で工事が止まった城に関しては、当初の目的を達したのでここで止めるという場合と、やはり工事は進めていたが、なんらかの理由で、途中で止めざるを得なかったと考えざるを得ないものもありそうである。

さらに石城山神籠石は城壁工事がある程度進んでおり、北門（第一門跡）の唐居敷が未完成品であるならば、全工程の後半の門の建物工事段階で中止した、といえるのかもしれない。御所ヶ谷神籠石においても、第2東門に関しては、もしかすると工事途中であった可能性も無視できず、気になるところである。

このように、「未完成」についても、工事初期段階の未完成、工事のある段階での意図的中止・未完成、そして工事は続けていたが、なんらかの理由で工事が中止になった未完成など、いろいろありそうである。このような未完成のあり方は、それぞれの山城のもつ意味、たとえば築かれた場所・立地、つまり、もし同時期にいくつかの城を並行して造っていたのであるならば、その中の優先度が低かった可能性や、単にその地域でのなんらかの理由で築城工事が遅れ、そのまま中止となった可能性などが考えられることになる。完成した山城と未完成の山城のもつ意味、未完成の山城の中での工事進捗状況の違いの意味などいろいろと考える材料になりそうである。

**完成した山城と未完成の山城** 現時点で城壁が完全にめぐらされている完成した山城、完全に城壁はめぐっていないが、自然地形の利用を含めてほぼ完成していると考えられる山城は、筑前大野城跡、肥前基肄城跡、対馬金田城跡、肥後鞠智城跡などのいわゆる朝鮮式山城と、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石などの神籠石系山城、計6カ所である。備前大廻小廻山城もこれに含めても良いのかもしれないが、門が確認できなかった点は気になるところである。逆に讃岐屋嶋城跡は西門（正門？）は完成していたようであるが、そのほかの門や自然地形利用の城壁線の検討が必要であろう。

一方、確実に未完成、またはおそらく未完成と推測されるものが、筑前阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・杷木神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石、豊前唐原山城跡、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、播磨城山城跡など9カ所ある。そのほか筑後高良山神籠石は北部に城壁がない部分があり、完成後の地震による崩れなのか、それとも未完成なのか今後意識的な調査研究が必要であろう。

このように、およそその概要がわかる古代山城22カ所のうち、6カ所が完成している可能性が推測され、9カ所が未完成の可能性が高いことがわかった。

『日本書紀』などに記されたいわゆる朝鮮式山城ではその所在地が確認されている6カ所のうち4カ所が完成しており、城壁線がわからない高安城は何とも言い難いが、讃岐屋嶋城は西門が確認でき、城壁線に関してはひとまず厳しい崖や急傾斜の部分は自然地形を利用していた可能性が考えられる。ただ、屋嶋城跡に関しては、頂上部の城壁線とは別に、西側中腹に浦生の石墨と呼ばれている石墨がある。最近の調査で古代のものである可能性が高まり、その実態把握調査が進められているが、その北側に位置する雉城と推測される部分の北側城壁線がよくわからない。もしこの石墨が屋嶋城跡に伴うものであるならば、この部分は未完成である可能性がある。そうすると、雉城の北側に城壁線が延びないこれ自体を完成品とみるのか、頂上部は完成しているが、この石墨部分は未完成であるのか、さらに、頂上部も工事途中であるのかなど、いろいろと興味深い疑問が生まれてくる。このように考えると、讃岐城山城跡も内城と外城で、工事の進捗状況に差があった可能性が推測できるのかもしれない。

いずれにせよ朝鮮式山城に関しては、実態のよくわからない高安城を除くと基本的に完成していると考えて良いのかもしれない。

一方、神籠石系山城に関しては、ほぼ確実に完成しているのではないかと推測されるものは鬼ノ城と御所ヶ谷神籠石のみである。山城の場合、すべての城壁、城内の施設を把握することは極めて難しい。今回取り上げなかった城に関してもそのような意識で調査・検討すれば、もう少し詳しい検討ができるかと思うが、

現時点では神籠石系山城に関しては、完成したものは比較的少なそうで、未完成または途中で工事が止まつたものの方が多いようである。

このように神籠石系山城に未完成のものが多いという意識で古代山城全体を見てみると、以前から検討されてきた築城時期の問題に関しては、朝鮮式山城より古い城で未熟であったため工事が止まったという考えも成立するように思われるし、逆に7世紀末頃に築城が始まり、すぐに城が不要になったため、工事を停止したとも考えられ、やはり答えは簡単には出そうにない。

そして、朝鮮式山城と神籠石系山城を併せて、完成した城の分布を見ると、667年の対馬金田城、665年の大野城・基肄城、そしてほぼその頃に築城されたと推測される肥後鞠智城が大宰府地域を中心に北と南を意識して築かれていることがまずわかり、そして豊前御所ヶ谷神籠石と備中鬼ノ城、さらに667年の屋嶋城、場所は未確認であるが665年の長門城の位置を考えると、これらが一連の唐・新羅からの攻撃を意識して築城したものではないかと推測されるのである。これに備前大廻小廻山城を加えれば、当時の防衛線として対馬から北部九州・中九州、そして瀬戸内海沿岸地域のこれら山城が築かれた場所が当然のことながら重視されていたといえるのではないであろうか。

またこのように見ると、ただ文献に記録がないということでひとまずひとまとめにしている神籠石系山城も完成した可能性が高い鬼ノ城や御所ヶ谷神籠石と明らかに未完成と考えられる城とで、そのほかの特徴もあわせ検討することで、区分することができるかもしれない。少なくとも鬼ノ城に関しては、以前から述べているように懸門構造・門床面の石敷き・雉城の存在などの特徴は667年の対馬金田城や讃岐屋嶋城と類似しており、その造営時期が近いのではないかと考えられる（亀田2009）。

これまで、古代山城を検討する場合、その規模や立地などいろいろの素材が取り上げられてきたが、このように山城が完成していたのか、それとも途中で止まっているのか、それもどの段階で止まっているのかということなども検討材料になるものと思われる。つまり今後の山城調査では、列石・土壘の有無を含めた城壁線の確認とともに、残りのあまりよくなさそうなところも、木柵などはないのか、どのような工事進捗段階であったのかなどを意識して調査を進める必要がありそうである（当然すでにそのような検討を進められている山城はあるのであるが）。

**繕治（修理・修築・改修）** 最後に、このような完成・未完成の山城群が存在することが確認できたが、完成したと考えられている大野城・基肄城・鞠智城には文武天皇2（698）年の繕治（修繕）記事がある。この「繕治」については、ひとまず城が完成し、その後建物や城壁などが時間とともに傷み、建て替え、または修繕しなければならないなどの理由から繕治したと考えられるが、一方で未だ工事途中で土砂崩れや地震などによって城壁などが壊れ、それを修築したのかもしれない。また、それらとともに、これまで多くの諸先学が述べてこられたように、掘立柱建物から礎石建物に建て替えたことを示しているのかもしれない。それは単に建て替えだけではなく、機能の変化を含んでの繕治かもしれない。

いずれにせよ、これらの3つの城はこの記録とともに出土遺物、土器や瓦によっても7世紀末～8世紀初め頃になんらかの行為が行われた（繕治された）と考えられている。土器の場合は使用年代の幅の問題があり、細かく区切ることはできないが、量的な検討を行えば、ある程度の変遷を押さえることができる。大野城跡や基肄城跡では残念ながら、そのような量的な処理は未だされていないようであるが、鞠智城跡では木村龍生によってその検討がなされている（木村2012）。

木村の成果によれば（第4図5）、まず築城以前の6世紀後半代からの土器がみられ、このころからのちの城内に人々が住んでいたことがわかり、鞠智城築城期の7世紀第3四半期に土器が少し増加し、文武天皇2（698）年の繕治記事に対応する可能性がある7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の土器が急増していること、そして興味深いことに8世紀代2四半期と第3四半期の土器がなく、次に8世紀第4四半期

の土器が比較的出土し、その後再び9世紀第1四半期・第2四半期の土器がほとんどなくなり、9世紀代3四半期に急増し、第4四半期まで続くことが明らかにされている。この土器の量的変遷は7世紀後半～8世紀初め頃と推測される平行文や格子目文瓦の量、そして8世紀末頃と推測される縄目文瓦の存在などとうまく合致しており、『続日本紀』などの記録とも対比できるのではないかと思われる。

そこでこのような繕治記事がある3つの城とそうではない城を比較してみると明らかになるものがありそうである。

例えば、対馬金田城跡では大野城跡や鞠智城跡ほどではないが、調査も進められ、城内施設も明らかになっている。そこで興味深い点は土器などの遺物が現時点での成果であるが、基本的に8世紀初まで下がりそうなものがほとんどなさそうであること（第3図3）と、礎石建物が確認されていない点である。「未確認である」ということはいずれ発見される可能性が当然あり、そう簡単に「ない」とはいえないものであるが、これまでの調査ではないようである。いずれ城内の全域を調査する中で礎石建物や8世紀以降の土器や瓦などが発見される可能性は当然あるのであるが、『日本書紀』の天智紀に築城記事が見られる九州の城（確認されているもの）で繕治記事がないのはこの金田城だけである。記録は当然なんらかの理由で記されないこともあるので、「ない」ということを強調することは問題であるが、現時点での遺構と遺物に関する成果を積極的に評価すると、この繕治記事が見られないことに意味を認めて良いのかもしれない。

ただ、一方で、城内のビングシ山地区の土壘に関しては、上下2層が確認されており（第3図2）、その上層土壘に伴う門礎石の形が外郭線石壘の門礎石と同じグループのものである。このあり方をどのように理解すべきか。この改修を記録はないが、698年のほかの城における繕治記事と関連させることもできるかもしれない。しかし礎石建物や瓦がないことなどを積極的に評価するならば、やはり記録に記された698年の3城繕治と金田城の考古学的に確認されている土壘の改修は別のものと理解すべきなのかもしれない。いずれにせよ、城の改修（繕治）はその城の重要性、少なくとも改修して維持・使用しなければならない、という可能性を示しており、城が完成している、と同じくらいの意味を持っているものと推測される。つまり文献史料・考古学的成果、いずれにおいても繕治・改修の痕跡が確認できる城は重要な城であったことを推測させるのではないであろうか。つまり、繕治・修理・改修などの痕跡も山城研究に役立つものと推測されるのである。

また、『日本書紀』などの記録に記されていないいわゆる神籠石系山城においても、発掘調査がそれなりに進んでいる城であれば、やはりそれなりに遺構や遺物は確認されている。備中鬼ノ城はその代表的な例であり、遺構と遺物の総合的な検討によって城の使用期間や使用状況が明らかにされつつある（金田・岡本2013、p.174）。特に鬼ノ城西門南東側の石垣部分では修繕の可能性が推測され（第5図2）、城内遺物の量的な変化（7世紀第3四半期の遺物が少なく、第4四半期～8世紀第1四半期頃の遺物が多い）は鞠智城跡における土器の量的な変化と対応しているようにも思え、鬼ノ城における築造とその後の修理を含めた維持管理が推測できるのではないであろうか。このようにある程度の遺物・遺構が確認できている城であるならば、それらを総合的に検討することによってより正確な城の変遷が明らかになるのではないかと推測される。

逆に言うと、やはり神籠石系山城では遺物はあまり出土しておらず、遺構もよくわかっていない。このように、以前から神籠石系山城の特徴としてあげられていた「遺構がわからない」ということは、城が未完成であった、工事が途中で止まってしまった、また長期間使用されなかった、などのことがらを示しているのかもしれない。

## 5. おわりに

以上、古代山城は完成していたのか、未完成であったのか、という視点から古代山城をみてきた。その結果として完成、またはほぼ完成したと考えられるものは、『日本書紀』などの記録に記されたいわゆる朝鮮式山城では 6 遺跡中 4 遺跡の大野城・基肄城・金田城・鞠智城、そして記録の見られないいわゆる神籠石系山城では 16 遺跡中、鬼ノ城と御所ヶ谷神籠石の 2 遺跡のみであり、逆に未完成と推測されるものは朝鮮式山城では現時点ではよくわからず、神籠石系山城では 16 遺跡中、唐原山城跡・阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・女山神籠石・おつぼ山神籠石・播磨城山城跡など 6 遺跡以上ある。

このような記録に記された山城と記されなかった山城の完成・未完成を合わせ検討してみると、完成した山城群の意味、また未完成の山城群の意味が多少見えそうである。

まず、完成した山城の場所はそれぞれの地域の中で重要な場所であることが改めてわかる。そしてやはり記録にもあるように古い段階から築城され始めたのではないかと推測される。

未完成の山城は、意図的な未完成なのか、それとも否応なしの未完成なのか。「見せる城」という意識は当然存在したと思われる。ただ、それによって当初から、たとえば一部しか造ることを考えていなかったのか、それとも工程の関係で停止し、そのままになったのか、などによって築城時の様子が推測できそうである。そしてこれらの「未完成」、途中での停止は単なる偶然ではなく、当時の政治・社会情勢を反映したものと考えられる。

完成と未完成、未完成の諸段階、遺構の有無・多寡、遺物の多寡、これらのもつ意味をさらに検討していくとなにか新しい古代山城研究の方向性が見えるのではないかと期待している。

そして、「大野城・基肄城・鞠智城」の 698 年の繕治記事は城が維持管理されている、この時期に繕治しなければならない国家の意識を反映していると推測され、ほかの城との重要性、性格の違いなどを示していると考えられ、「繕治」は意味を持っていると思われる。そのような意味で、鬼ノ城城壁の修理の可能性はこの城の重要性を示しているということができるのではないかであろうか。

以上のように考えてくると、諸先学がすでに述べてこられた「未完成」という考え方も改めて整理検討することで、新たな視点が見えてきそうである。「完成」「未完成」そして「繕治」が古代山城研究のキーワードの一つになるのではないかと思われる。

小稿をなすに当たり、たくさんの方にお世話になった。末筆ながら記して謝意を表したい。

赤司善彦、石松好雄、稻田孝司、大田幸博、大橋雅也、岡田博、岡本泰典、小鹿野亮、小川秀樹、小澤佳憲、小田富士雄、尾上元規、金田善敬、狩野久、河原剛、木村龍生、草場啓一、猿渡真弓、白木守、末永浩一、鈴木拓也、須原緑、高橋護、田中淳也、田中正弘、谷山雅彦、田平徳栄、出宮徳尚、西住欣一郎、能登原孝道、乗岡実、原田保則、平井典子、松尾洋平、松瀬京子、松村一良、向井一雄、村上幸雄、矢野裕介、山口裕平、山元敏裕、横田義章、義則敏彦、渡邊誠、渡邊芳貴

### 〈註〉

- (1) 古代山城の文献史料については、鈴木 2011などを参照した。
- (2) 小稿をなすに当たり、以前からいろいろな方にお世話になっていたが、今回改めて以下の方々にいろいろとご教示いただいた。対馬金田城跡に関しては、田中淳也さんに炎天下ほぼ一周ご案内いただいた。肥前基肄城跡に関しては、田中正弘さんにご案内いただき、いろいろとご教示いただいた。肥前おつぼ山神籠石に関しては、原田保則さん、松葉京子さんにお世話になった。特に松葉さんには城壁線を一周ご案内いただき、さらに西側に点的に確認されている列石の場所について細かくご教示いた

だいた。筑後高良山神籠石については、松村一良さん、白木守さんにいろいろとご教示いただいた。肥後鞠智城跡に関しては、矢野裕介さん、木村龍生さん、能登原孝道さんに城全般、遺物などについていろいろとご教示いただいた。豊前御所ヶ谷神籠石に関しては、小川秀樹さん、山口裕平さんにいろいろとご教示いただいた。豊前唐原山城跡については、末永浩一さんにいろいろとご教示いただいた。周防石城山神籠石については、河原剛さんにいろいろとご教示いただいた。備中鬼ノ城については、村上幸雄さん、谷山雅彦さんにいろいろとご教示いただいた。備前大廻小廻山城については、出宮徳尚さん、乗岡実さんにいろいろとご教示いただいた。讃岐屋嶋城跡に関しては、山元敏裕さん、渡邊誠さんにいろいろとご教示いただいた。伊予永納山城に関しては、渡邊芳貴さんにいろいろとご教示いただいた。播磨城山城跡に関しては、義則敏彦さんにご案内いただき、いろいろとご教示いただいた。記して謝意を表したい。

なお、小田富士雄先生、石松好雄さん、赤司善彦さん、向井一雄さんには常日頃から山城全般に関するいろいろとご教示いただいている。石松さんには、今回は特に女山神籠石を含め、多くのことをご教示いただいた。記して謝意を表したい。

(3) 山口 2003 論文の註 (19) に赤司善彦氏の支柱説が掲載されている。

#### 〈引用・参考文献〉

- 石松好雄 1976 「女山神籠石」『考古学ジャーナル』117 ニュー・サイエンス社  
石松好雄 1992 「大野城」『太宰府市史考古資料編』太宰府市史編集委員会  
磯村幸男 1978 『史跡女山神籠石保存管理計画策定報告書』瀬高町教育委員会  
井上裕弘・宮小路賀宏 1984 『鹿毛馬神籠石』穎田町教育委員会  
入佐友一郎・小澤佳憲編 2010 『特別史跡大野城跡整備事業V』福岡県教育委員会  
大野城市教育委員会 2010 『古代山城サミット』  
岡田 博・亀山行雄 2006 『国指定史跡鬼城山』岡山県教育委員会  
小川秀樹 2006 『史跡御所ヶ谷神籠石I』行橋市教育委員会  
小川秀樹 2010 「豊前・御所ヶ谷山城」『古代文化』62-II 古代学協会  
小田富士雄編 1983 『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10 名著出版  
小田富士雄編 1985 『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13 名著出版  
小田富士雄 1997 「西日本古代山城に関する最近の調査成果—特に朝鮮式山城について—」『古文化談叢』  
37 九州古文化研究会  
小田富士雄 2009 「第3編 第2章 第3節 基肄城跡の築城」『基山町史』上巻 基山町史編さん委員会  
小田富士雄 2011 「基肄城跡」『基山町史』資料編 基山町史編さん委員会  
小野忠灘 1983 「石城山神籠石」小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版  
鏡山 猛 1968 『大宰府都城の研究』風間書房  
鏡山 猛ほか 1965 『おつぼ山神籠石』佐賀県教育委員会  
加藤史郎ほか 1988 『城山城』新宮町教育委員会  
加藤史郎 1995 「播磨・城山」『古代文化』47-11 古代学協会  
金田善敬・岡本泰典編 2013 『史跡鬼城山2』岡山県教育委員会  
亀田修一 2009 「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学『岡山学』研究会『鬼ノ城と吉備津神社—「桃太郎の舞台」を科学する』吉備人出版  
亀田修一 2012 「対馬金田城小考」『百済と周辺世界』成周鐸教授追慕論叢刊行委員会

## 古代山城は完成していたのか

- 川述昭人編 1982『女山・山内古墳群』瀬高町教育委員会
- 木村龍生 2012「第VI章 第1節(1) 鞠智城跡出土の土器について」西住ほか『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 九州歴史資料館 1987『大宰府史跡昭和61年度発掘調査概報』
- 草場啓一編 2008『阿志岐城跡－阿志岐城跡確認調査報告書(旧称 宮地岳古代山城跡)』筑紫野市教育委員会
- 草場啓一編 2011『阿志岐城跡Ⅱ－阿志岐城跡確認調査報告書総括編』筑紫野市教育委員会
- 古代山城研究会 1996『讃岐城山城跡の研究』『溝瀬』6
- 古代山城サミット実行委員会 2010『古代山城サミット展示会 あつまれ!!古代山城』
- 佐田 茂 1982『神籠石系山城の再検討』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
- 猿渡真弓 2013『女山神籠石』みやま市教育委員会
- 島津義昭編 1983『鞠智城跡』熊本県教育委員会
- 末永浩一 2003『唐原神籠石Ⅰ』大平村教育委員会
- 末永浩一 2005『唐原山城跡Ⅱ』大平村教育委員会
- 鈴木拓也 2010『軍制史からみた古代山城』『古代文化』61-4 古代学協会
- 鈴木拓也 2011『文献史料からみた古代山城』『条里制・古代都市研究』26 条里制・古代都市研究会
- 須原 緑 1998『国指定史跡鹿毛馬神籠石』額田町教育委員会
- 総社市教育委員会 2005『古代山城鬼ノ城－展示ガイド－』
- 武雄市教育委員会 2011『史跡おつぼ山神籠石保存管理計画書』
- 田中淳也・古門雅高編 2000『金田城跡』美津島町教育委員会
- 田中淳也・古門雅高編 2003『古代朝鮮式山城金田城跡Ⅱ』美津島町教育委員会
- 田中淳也編 2008『古代山城特別史跡金田城跡Ⅲ』対馬市教育委員会
- 田中淳也 2010『金田城跡－二ノ城戸・南門について－』『古代文化』62-II 古代学協会
- 田中淳也編 2011『古代山城特別史跡金田城跡Ⅳ』対馬市教育委員会
- 田平徳栄 1983『基肄城考』九州歴史資料館編『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上 吉川弘文館
- 対馬市教育委員会文化財課 2012『対馬市文化財シンポジウム対馬の古代を探る～山城と古墳が築かれた謎の7世紀～大会記録集』
- 出宮徳尚・乗岡 実 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』熊本県教育委員会
- 原田大六 1959『神籠石の諸問題』『考古学研究』6-3 考古学研究会
- 光市教育委員会 2011『史跡石城山神籠石保存管理計画策定報告書』
- 正木茂樹編 2010『鬼ノ城～謎の古代山城～』岡山県立博物館
- 松尾洋平・谷山雅彦 2006『古代山城鬼ノ城2』総社市教育委員会
- 松村一良 1990『日本書紀』天武七年条にみえる地震と上津土壙跡について』『九州史学』98 九州史学会
- 松村一良 1994『高良山神籠石』『久留米市史 第12巻資料編(考古)』久留米市史編さん委員会
- 松本豊胤 1976『城山』『考古学ジャーナル』117 ニュー・サイエンス社
- 宮小路賀宏ほか 1970『杷木神籠石』杷木町教育委員会

- 宮小路賀宏・亀田修一 1987 「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学 6 歴史時代』雄山閣
- 向井一雄 1999 「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27 地域相研究会
- 向井一雄 2004 「IX-2 山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』奈良文化財研究所
- 向井一雄 2009 「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝瀬』14 古代山城研究会
- 向井一雄 2010a 「古代山城研究の最前線—近年の調査成果からみた新古代山城像—」『季刊邪馬台国』105
- 向井一雄 2010b 「駅路からみた山城—見せる山城論序説—」『月刊地図中心』453 (財) 日本地図センター
- 村上幸雄 1998 「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』8
- 村上幸雄・松尾洋平 2005 『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会
- 山口裕平 2003 「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』50(上) 九州古文化研究会
- 山元敏裕編 2003 『史跡天然記念物屋島』高松市教育委員会
- 山元敏裕編 2008 『屋嶋城跡Ⅱ』高松市教育委員会
- 横田義章 1991 『特別史跡大野城跡VII』福岡県教育委員会
- 横田義章・芳沢 要 1979 『特別史跡大野城跡III』福岡県教育委員会
- 渡邊芳貴・半沢直也 2005 『永納山城跡』西条市教育委員会
- 渡邊芳貴編 2009 『史跡永納山城跡I』西条市教育委員会
- 渡邊芳貴 2012 『史跡永納山城跡II』西条市教育委員会

〈挿図出典〉(いずれも一部改変引用)

- 第1図1：古代山城サミット実行委員会 2010、2：横田 1991、3：入佐・小澤編 2010、4：横田・芳沢  
1979
- 第2図1：古代山城サミット実行委員会 2010、2～4：小田 2011
- 第3図1：田中 2010 と国土地理院 1/25000 地形図「阿連」を合成、2・3：田中・古門編 2000
- 第4図1～5：西住・矢野・木村編 2012
- 第5図1：古代山城サミット実行委員会 2010、2：村上・松尾 2005、3：金田・岡本編 2013
- 第6図全体図：小川 2010、出土土器：小川 2006
- 第7図：松本 1976
- 第8図1・2・8：古代山城サミット実行委員会 2010、3・4：向井 2010b、5：武雄市教育委員会 2011、  
6：加藤 1995、7：小野 1983
- 第9図讃岐城山城（下）以外：村上 1998、讃岐城山城（下）：古代山城研究会 1996